

2018年の干支「戌」の話あれこれ

●「戌」にまつわる話題

来年は、平成に入り節目となる平成30年。干支は「戌(いぬ)」です。犬は、ことわざや昔話にもよく登場し、また、日本各地に犬を祭神とする社寺が存在するなど、古くから人間にとって身近な動物です。

今週は、2017年最後の『きらぼしマネジメントニュース』として、「戌」にまつわる話題をお届けします。

●「戌戌」は繁茂した草木を刈り、再生させる

2018年の干支、「戌」は正確には戌戌(つちのえいぬ)にあたります。中国から伝わった干支は本来、「甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸」の十干(じっかん)と、「子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥」の十二支の組み合わせで表され、60年で一周します。60歳を祝う「還暦」は、十干十二支の暦がまた始めに戻り、生まれた年の干支が巡ってくるため、赤色を身に付けるのは、もう一度生まれ変わって出直す、つまり赤子に戻る意味だといわれています。

「戌戌」のそれぞれの漢字の意味や成り立ちをみると、「戌」は「茂」に通じ、植物の成長が絶頂期にあるという意味を持っています。また、物事の成長段階でいうと、これまでに蓄えてきたエネルギーや機運などが茂りを迎える状態だそうです。

また、「戌」は、「滅」に通じ、草木が枯れる状態という意味があります。「戌」は「戌」に陽気を表す「一」があり、「草木が茂る中に陽気がある」つまり、茂った草木を刈込み、風通しや日当たりをよくして根固めをすると、また草木が生き返ります。そのための力となる陽気が残っており、中にある陽気を生かせばその後も繁茂が続くということだそうです。

さらに、「戌」「戌」どちらも「茂」の字を語源とする説もあり、これらを合わせた「戌戌」は、絶頂期まで茂った草木を刈込み、再生させると捉えられます。

ちなみに「戌」は、後に干支を覚えやすくするために日本でも動物の「犬」の読みが当てられたものです。

また、犬はお産が軽いとされることから、日本では安産祈願を戌の日に行う風習が有名です。

●60年前の「戌戌」はこんな年

それでは、「戌戌」の年はどんな1年となるのでしょうか。過去の「戌戌」を振り返ってみると、2018年から数えて60年前の「戌戌」は1958(昭和33)年。戦後高度成長時代の好景気のひとつ、岩戸景気がこの年の7月から1961年12月までとされています。政権は、現在の安倍首相の祖父、岸信介の岸内閣。皇太子妃が決定し、東京タワーが完成。1万円札の発行もありました。三種の神器をはじめ電化製品がよく売れ、インスタントラーメンが発売されるなど、高度成長期に向かってまさに物事が「茂り」を加速させた年だったといえます。

さらに60年前の1898(明治31)年は、6月に大隈重信が内閣総理大臣に任命され、日本で初めての政党内閣を組閣。それまで繁栄を続けてきた藩閥政治を刈込み、新たな草木の成長を成したともいえそうです。

●さらなる発展が期待される2018年

2017年は、景気が緩やかな回復をみせ、日経平均株価は2万円超え、ドル円相場も米好景気を受けて一時114円台後半をつけました。政界では、春に小池東京都知事が誕生し、秋の衆院選では与党が圧勝し、今年の漢字にも選ばれた「北」の緊張感はピークに…など、なにかと変化の兆しがみられます。

これまで繁茂を続けてきた草木を一度刈ってしまうことで、新たな力を得て伸びる「戌戌」。順調に伸び続けてきたものをバッサリと切るのは、なかなか勇気のいることですが、切ってみればさらなる繁栄の芽吹きとなるのかもしれませんが。2018年は、発展してきた物事が再び大きく飛躍する1年、大きな変化を遂げる1年となることが期待されます。

COFFEE BREAK

空き駐車場で新ビジネス

都市で問題となる路上駐車。一方で、月極駐車場や個人宅、事業所、マンションなどの駐車場に空きは多いそうです。休日、人気スポットへ車で出かけたら駐車場は長蛇の列。付近をグルグルまわり、コインパーキングを探すもどこも満車……という経験のある方も多いはず。こうした駐車場ニーズと空き



駐車場のマッチングを行うビジネスがここ数年、好調です。システムは各社おおむね同様で、オーナーが駐車場の場所や空き時間などを登録すれば、企業がネット上でマッチングし、駐車場を時間貸するという流れ。登録費や初期投資費用がかからないこともあり、駐車場オーナーにも好評だそうです。